

マタイの福音書の5章を今朝の午前礼拝のテキストにしたいと思いますが、5章と言っても今日は特に1節から12節までを取り上げたいと思います。ここは大変有名な箇所ですから、皆さんも何度となく読むだけでなく、説教の題材ともなって学んでいる方も多いと思います。ここを見る前に皆さんに一つ質問をしたいと思います。今皆さんは幸せでしょうか。「幸せです」と胸を張って、作り笑いをせずに、無理な笑顔を造らずに、「ハイ私は幸せです」と手を挙げることのできる方は幸いです。でも幸せにはなりたいたい、これは誰もが同感だと、全員もちろん手を挙げて頂けると思います。もしあなたが幸せならば、今日このテキストを通してより一層その幸せを噛み締めて頂きたいと思いますが、「幸せでない」と思う方は、また「幸せになりたい」と思う方は今日のテキストが皆さんのための神様からの個人的なメッセージとして受け取って頂きたいと思います。ここに書かれていることを皆さんが額面通り素直に心に受け止めるならば、あなたは今不幸せでも必ず幸せになります。今悲惨な状態でも、不幸な状態でも必ずこのテキストを通して、この神の言葉を通してあなたは心満たされ、祝福され、不安なものも恐れるものも、何か足りないものも、みなこのマタイの5章の1節から12節を通して必ず幸福になれるということをお約束したいと思います。特にマタイの5章から7章というところは、イエス・キリストの最も有名な説教の一つで『山上の垂訓』と古くから呼ばれている箇所です。『山上』というのは山の上と書きます。『垂訓』という言葉は垂れるに訓戒の訓と書きます。最近では『垂訓』という言葉は使わずに『山上の説教』というふうにも呼ばれます。英語では“Sermon on the Mount”。で、その中で5章の1～12節というのは、『至福の教え』とも呼ばれます。『至福』とは至るに幸福と書きます。幸福に至る教えが、これから見るマタイの5章1節から12節にあたります。ここには8つの幸福になるための、8か条と言われるもの。それは8つの幸福ということで『八福の教え』、八の幸福と書いて『八福の教え』とも呼ばれる箇所です。マタイの福音書は王としてのイエス・キリストをテーマとしています。このことは前回お話したと思います。マタイの福音書はイエスが王であるということを強調しています。マルコの福音書はイエスがしもべであるということを強調し、それをテーマとしています。ルカの福音書はイエスが人の子である、人間である。100%人間でもあり100%神でもある、これがユニークな私たちの信じる救い主のことです。で、ヨハネの福音書はイエスが神の子である、またはイエスが神ご自身だということをテーマとする福音書であります。で、マタイの福音書は、話を戻しますと、王としてのイエス・キリストを一大テーマとしてますので、イエスの支配する王国こそが、福音書の中に出てくる『天の御国』だとか『神の国』と呼ばれるものです。これは地上の王国とは違います。目に見える地上世界とは違って、天上世界の話であります。神の国はこの地上の王国とは違って、永続するものです、永遠に続くものですから、コロコロ変わることもありませんし、もちろん滅びることもありません。地上の王国は、地上の国々はいつかは滅びます。栄枯盛衰という言葉があります。そして、王が代われれば、支配者が代われれば、指導者が代われれば、その国もまた体制もコロコロ変わります。自民党から民主党に代わるだけでもコロコロ変わります。でもイエス・キリストの治める、支配する王国はそうコロコロ変わったり、常に支配者がすぐ替わるような、常に体制が代わって不安定になるようなことはありませんし、滅びゆくこともありません。そしてそのイエスの治める、支配する神の国の憲法にあたるものが、このマタイの5章から7章の内容『山上の垂訓・山上の説教』と言う部分です。とりわけ今朝のテキストの5章の1節から12節はその神の国における、または天国におけると言い換えてもいいかと思えます。天国人としての、天国の市民、私たちクリスチャンは「国籍が天にある」と言われてますので、天国民としての生活態度、天国民としての家訓というものです。それはもち

ろん『至福の教え（幸福に至る教え）』で、8つの8か条が、『八福の教え』がこの中に見られます。

で、早速5章の1節から見ていきたいと思います。

**1：この群衆を見て、イエスは山に登り（山上です）、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。**

『この群衆を見て』とありますが、前節の**4章25節**を見て頂くと、その群衆たちは

**2：ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸からおおぜいの群衆がイエスにつき従った**

と。丁度イスラエル中から群衆がイエスの説教を聞きたい、イエスに一目会いたいということで、遠い人は160km以上もの道のりを共にイエスと巡ってきたわけです。『山に登り』というのは、これはガリラヤ湖の湖畔にある丘のことです。今でもイスラエルに行きますとこの山上に登ることができます。素晴らしい眺めです。そして、イエスはそこでお座りになりました。群衆の多くはユダヤ人ですので、ユダヤ人の慣習を知る必要があります。ユダヤ人は説教をする時、ユダヤ教の教師と呼ばれるラビが聖書の言葉を教える時は必ず座ります。ですから、今私は立って皆さんは座っていますが、ユダヤ人の社会では逆です。私が座って、皆さんが立ったまま、日本一長いメッセージを聞かされることになるかと思いますが、日本人で良かったなと皆さん今思われていると思います。それは冗談ですが、『おすわりになる』というのはこれから重要なことを教えるということが示唆されてるわけです。で、弟子たちは御許に来ました。イエス・キリストの弟子であるならば、常にイエスの御許に行って、イエスの足元に行って教えを乞うものであります。

で、早速、3節以降が『至福の教え・八福の教え』にあたるもの。英語では”beatitude”と呼ばれる箇所であります。『幸いです』という言葉が9回この中に繰り返されています。『幸い』という原語は、新約聖書はギリシャ語で書かれていますので、原語はギリシャ語になりますが、”makarios”（マカリオス）と言います。『幸い』のギリシャ語は『マカリオス』。一体何が幸せなのか、幸いなのか。今皆さんにも考えて頂きたいと思います。単に物事が自分の思い通りに、願い通りに進むということが幸せということでしょうか。この『マカリオス』という言葉は、厳密には『神に祝福されている・神の祝福を受けた』という意味で理解されます。ここに幸せの鍵があります。私たちは、「自分の思いや願いや実現したら幸せだ」と考えているところがあるかと思えます。志望校に入学出来たら、恋人が出来たら、仕事に成功したら、マイホームを手に入れることが出来たら、あの資格が取れたら、昇進したら、昇格したらと。家だとか、お金だとか、車だとか、恋愛だとか、友情だとか、仕事だったり、また資格や出世や名誉、業績、成功といったものが自分に幸せを運んでくれると多くの人は思いがちであると思います。でももしそれが事実であるならば、真実であるならば、どうしていわゆるこの世の成功者たちは、簡単に命を絶ってしまうのでしょうか。だれもが羨むような有名人、成功者、セレブと言われる人たちが自殺をしたり、または麻薬に手をだしてみたり、だれもが羨むカップルが離婚してみたり。必ずしも目に見える成功というものが人を幸せにするわけではないということを私たちは認めざるを得ません。むしろ私たちの幸せといったものは、神様との関係にかかっているということを今日しっかり心に留めて頂きたいと思います。私たちの幸福とは、神との関係にかかっているということを。首尾よく合格しても神を知らなければ、幸福感は長続きはしません。好きな人と結婚できたとしても神を知らなければ、不安だけであります。私たちは自分を造って下さった創造者である神を離れては、本当の意味では満足出来ません。本当の意味では幸せになりません。何のために生きているのか、生きる目的も分からずに生きていても虚しいばかりであります。私たちを造って、目的をもって形造って下さった神だけが、私たちのすべてをご存じであって、私たちにまことの喜び、まことの満足をもたらして下さいます。どんなことがあったとしても揺るがされない平安を、この神だけがあなたに与えることができます。この神との関係を破壊してしまうもの、それが聖書では『罪』と呼ばれるものです。幸福を損なう私たちの『罪』が、この神によって解決されなければ誰も幸福になる

ことは出来ません。この本物の幸せのことを聖書では『マカリオス』と言われるわけです。それは神との関係を正しく持つことと考えられます。神の祝福を喜び、神を感謝することが、真の幸福をもたらします。ですからこの神を信じる者たち、すなわちクリスチャンたちはこの地上で最も幸福な人たち、最も満足している人たち、最も祝福されハッピーな人たちだと言えると思います。ですから冒頭に皆さんに質問したわけですが、皆さんは幸せでしょうか。クリスチャンならば「幸せである」と断言できると思います。

で、今からその幸福に至る、至福の人生の第1ステップから見てまいりたいと思います。3節がその第1ステップ、幸せな人生の第1のステップとは、自分の願いをかなえることではありません。自己実現、自己満足、自負心ではありません。3節には

### 3：心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。

この表現はなかなか日本の感覚で捉えると、すこし戸惑ってしまうかもしれません。「懐が貧しくても、懐が寂しくても、心だけは豊かに」そのように日本人は思いたいわけですが、そのようなニュアンスで捉えてしまうと、これは大きな誤解を生むかと思えます。ちなみにこの『貧しい』という言葉はギリシャ語では二つあります。一つは『ペネース』という言葉、もう一つは『トハース』”ptochos”という言葉で、前者の『ペネース』というのは、“ちょっと貧しい、貧乏”、後者の『トハース』という言葉は、“非常に貧しい、極貧、赤貧”という意味です。で、実はここで使われている心の貧しいの『貧しい』は、後者の『トハース』です。ちょっと貧しいどころではありません。かなり、非常に貧しい、極貧、赤貧であるということです。「あの人の心は貧しい」なんてことを言えば、非常に否定的に、ネガティブに使うわけですが、心が卑しい、乏しい、貧弱だというような意味合いで日本語は使いますが、ギリシャ語では『心』というのは『プニューマ』”pneuma”という言葉が使われています。ですからこれは『霊』という意味です。「霊において極貧である」と。英語の聖書では”poor in spirit”となっています。「霊において貧しい」と。それは言語のニュアンスを良く汲み取っていると思います。直訳は「霊において極貧である、霊において赤貧である」という意味です。その人は幸いです、その人は祝福されている、その人は満足している、満たされているといっているわけです。これをユダヤ人のイエス・キリストが語っているのですが、ユダヤ人の理解では、この霊の貧しさというのは、「ただひたすら神に依り頼む」という意味で捉えるわけです。座って説教を聞くというところからも、ユダヤ人の感覚・慣習というものを意識する時に、そのメッセージの内容ももっと意義深いものとなると思います。なかなか日本人の感覚で「心の貧しい」というふうに関心されると、誤解をされてしまうかもしれません。また「霊において極貧だ」と言われてもあまりピンとこないかもしれません。でもユダヤ人のヘブライ的な理解では、これは「ただひたすら神に依り頼む」という意味で捉えます。「ただひたすら神に依り頼む者は幸いです」と。心において、霊において、極貧です。要するに霊的破産者ということです。霊的に破産していると、ただひたすら神に依り頼む以外にはないわけです。霊という部分は、神様とつながる部分です。神様と交わる部分です。心で神を信じるわけですから、そこが貧しい、そこが非常に乏しいということです。だから「もうひたすら神に依り頼む以外には、もう生きる術はない」と。そのように自覚する人は幸いです。心の貧しい者というのは、神なしではどう生きていくことができない者のことを指します。では神様抜きで、神様無しで生きる生き方というのは他にあるのでしょうか。それはいくらでもあると思います。「私は自分を信じている。」自分を頼る生き方、自分の経験、自分の能力、それを頼りに生きる生き方もあります。または物に頼る生き方もあります。お金の頼る生き方もあります。もちろんお金が無ければ何も出来ないというもの、間違っていないと思います。でもそのお金ですら、神様が与えて下さいます。「いや、お金は私の力で稼いだものです」と言うかもしれませんが、あなたの力はどこから来ているのでしょうか。あなたの肉体は、あなたが作った

のでしょうか。あなたが吸っている空気はだれが作ったのでしょうか。ですから、私たちはすべて神無しでは生きていけない者ですけれども、残念ながら多くの方は自分の力で、お金の力で生きていくんだと。でもその結果はとても悲惨なものだということも経験的に皆さんは知っているはずです。先にも言ったようにセレブリティな人たち、セレブと呼ばれる人たち、有名人、成功者、金持ちという人が必ずしも幸せではないということを、私たちは知っているからです。神無しでは生きていけないという者は、神を人生の最優先、神様を一番とするということに重きを置いて、最終的には人生の総決算とされる場所、人生の総決算とはもちろん死後の世界のことです。死ぬ時に人生の総決算をします。人は生きてくように死んでいくのです。死に様は生き様を語るとよく言われますが、死ぬ時がその人のすべてを知ることのできる瞬間です。どのように死んでいくか、その姿を見ればこの人はどのように生きてきたのかということが一目瞭然であります。その後の世界がここで言われている『天の御国』です。心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。神を拠り所とする生き方は、死後の世界に素晴らしい祝福をもたらしていきます。天の御国が人生の総決算の場所であって、そこにおいて神様から最高の待遇を受けることができます。

幸福な人生の第1ステップは、心の貧しい物、自分自身が霊的に乏しい・貧しい者、霊的破産者である。なんと自分は弱い者か、罪深い者かということに気付くことです。これは私たち自身に対する態度、生活態度で言うならば私たち自身に対する態度というふうにも心に留めて欲しいと思います。あなたは自分のことをどのように見ているのでしょうか。霊的破産者だと見ているのでしょうか。誰でも聖なる神様に会った人は、自分自身が霊的に貧しいということに気がきます。神様と出会ってしまうと必然的に自分が霊的破産者である、すなわち全く罪深い者で、救い主無しでは、神抜きでは、とても生きていけないという自分の心のコンディションに気付く者です。実際の例として旧約聖書に登場する大預言者と呼ばれるイザヤは、不信仰で不従順な同胞のユダヤ人たちの罪を指さしてはまわり、またはその周辺の異教の国々のことを断罪しながら「あー、あなた方はもう駄目だ。あなた方には災いが来る。あー、駄目だ。あー、駄目だ。」と、イザヤ書の1章から5章で「あー、あー、あー」という言葉が何度も繰り返されていることにお気づきになると思います。これはもちろん預言者イザヤの警告でもあったわけですが、でも6章になるとユダヤの王のウジャヤ王が亡くなった時にその態度は一変します。イザヤはそれまでは人を指さしては「あー、お前たちはもう駄目だ。」と言っていたところ、6章からは「あー、私はもう駄目だ。」と言うようになりました。何が起こったのでしょうか。6章を見て頂くと、ウジャヤ王が死んだ年にイザヤは主の栄光を見ました。この主というのはヨハネ 12:41 (イザヤがこう言ったのは、イザヤがイエスの栄光を見たからで、イエスをさして言ったのである。)によれば、受肉前のイエス・キリストだと教えられています。イザヤが見たのは受肉前のキリストです。イザヤは神と出会ってしまったのです。そうすると必然的に自分が霊的に破産者であるということに気付かされます。だから彼はもう人を指さして「お前たちはもう駄目だ。なんという罪深い」という態度から、今度は自分に目を向けて「私はもう駄目だ。」と、この聖なる神を前にして、この栄光の主を前にして「私はもう駄目だ。なんという罪人か。私のような罪汚れた者はこの聖なる神の御前には到底立ちえない。」ということに気付いたわけですから。このような神に出会ったら、必ずと言っていいほど私たちは自分の罪深さに気がきます。光に近づけばどうなるのでしょうか。あなたの影はどんどん長くなっていきます。光に近づけば近づくほど、(神は光だと呼ばれています。)神に近づけば近づくほど自分の罪深さにより一層意識が向くわけですから。ペテロはガリラヤ湖の舟の上でイエスが神の子であることに気がきました。すると彼は「主よ、私から離れて下さい。私は罪深い人間ですから。」と思わず叫びました。もしあなたが神に出会ったならば、「私は大丈夫、特別問題はありませぬ。」という考えはなくなっていくということを感じて下さい。

次に第2ステップとしてテキストに、マタイ 5:4 になります。幸福な人生の第2ステップ

#### 4：悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。

あなたが、自分が罪人であるということに気付いたならば、あなたは自分の罪に対して嘆き悲しむようになります。「なんて私は罪深いのか。この罪はなんとおぞましいものか。この罪は私自身を傷つけるだけでなく周囲の愛する者たちも巻き込んで、そしてその罪のもたらす結果はなんとという最悪の事態をもたらすのか。」と、そのように私たちは自分の罪を嘆くようになります。罪責感、罪悪感にさいなまれ「もう私は駄目だ」と。「それでは全然幸福ではないじゃないですか」と思うかもしれませんが、でも幸いなんです。なぜならばイエス・キリストはあなたを断罪しないからです。イエス・キリストはまさにその罪のために、その罪のもたらす悲劇がどんなものであるのか、イエスは御存じです。『罪から来る報酬は死です。』とローマ 6：23 に言われている通りです。私たちは罪人ですから必ず永遠に滅びる者として、罪が神との関係を崩壊させるものだということも話しましたので、永遠に滅びるということは神と永遠に断絶されるという意味です。それがいわゆる地獄ということですから、「罪から来る報酬は死」というのは、『永遠の死』のことを言います。永遠の滅びのことを言うのですが、しかし神は私たちが誰一人滅びることを望んでいません。それ故に神はひとり子イエス・キリストをこの世に救い主として送って下さったわけです。ですからローマ 8：1 にあるように『キリスト・イエスにある者は（イエス・キリストを信じる者は）、罪に定められることは決してありません。』と言われている通りです。またヨハネ 8 章のところには姦淫の現場で捕らえられた女性がイエスの前に引きずり出されてきます。不倫現場を見つけられてしまった。イスラエルの律法では、姦淫の罪は死刑に相当したわけです。しかしイエスの前に連れて来られたこの女性は、イエスによって罪赦されました。そのストーリーは是非ヨハネの福音書 8 章を読んで頂いて確認して頂きたいと思います。イエスはこの時、畏にかけられようとしたのですが、しかしイエスは「罪の無い者がこの女に石を投げなさい」と。誰もが自分の罪を自覚しました。そして誰も裁けない状態になりました。イエスだけがその場に一人残されたのですが、もちろんイエスには罪が無かったので、残ることができたのです。そしてイエスは「わたしもあなたを罪に定めない。これからは罪を犯してはなりません。」と言って彼女を赦し、送り出して下さったわけです。またルカ 7：47 をお読みします。

47：だから、わたしは『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。」

これはまた別のストーリーですが、『罪深い女』というのは、遊女、売春婦、風俗嬢と呼ばれる人です。彼女もイエスに出会って罪を赦されました。イエスはあなたを断罪しません、罪に定めることはしません。そしてイエスは、あなたの罪を赦して下さいます。だから幸いです。イエスから慰めを受けることが出来ます。この幸福に至る第 2 ステップは、罪に対する態度を述べています。第 1 ステップは、自分の霊的破産状態を見る、自分自身に対する態度を物語っていましたが、第 2 ステップは罪に対する態度、罪に対する悲しみ。あなたは罪をどのように捉えているのでしょうか。自分自身の罪もそうですし、他人の罪もそうです。どのように罪を皆さんは捉えているのでしょうか。罪に対して軽率な態度をとってないでしょうか。罪に対してあまりにも無頓着でないでしょうか。または罪に対して常に言い訳じみたことばかりを繰り返し、弁解ばかりをして、言い訳ばかりをして、自分の罪も人の罪も大目に見てはいないでしょうか。自分の霊的状态を認識して、自分の罪に対して嘆き悲しむ者は、神の国で慰められるということも覚えて欲しいと思います。

で、第 3 ステップは 5 節、テキストに戻して下さい。

## 5 : 柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから。

これは他者に対する態度を述べています。他人に対する態度です。『柔和』という言葉は英語では”meek”と言います。聖書学校で、アメリカの聖書学校で、”meekness”（これは柔和という英語ですが）、は”weakness”（弱さという意味）とは違うということを教えられました。日本語で言えば『柔和』は『柔弱』とは違うということです。『柔弱』というのは「軟弱」という意味合いでとらえても構いません。精神や体が弱くて困難な耐えられない、それが『柔弱』という言葉ですが、『柔和』とは『柔弱』とは違います。『柔和』とは、むしろ『コントロールの下にある力』というのが原語の意味するところです。『ブラウス”praus”』というギリシャ語が使われていて、もともとは「手に負えない荒馬を調教して、乗れるようにすること」それが『コントロールの下にある力』を意味する『ブラウス』というギリシャ語です。これはセルフコントロールが出来ている人、あるいは神に依り頼んで神様にコントロールしていただいている人のことを指します。「そのような人は幸いです」と言われています。「地を受け継ぐから」とあります。「地を受け継ぐ」とはまさにこの地上においてもその人は成功するということがここに約束されています。柔和な人は地上でも大成功するということです。本当にそうでしょうか。柔和でない人は、短気です。自分がコントロール出来ません。ついちょっとしたことでカッとになって、ブチ切れてしまいます。その一瞬のカッとなることで、その一瞬の感情がコントロール不能になる状態で、多くの人は人生を損ねてしまいます。多くの人はすべて破壊してしまいます。それまで積み上げてきたものも一瞬の怒りによって、一瞬の感情の激しさによって破壊してしまうということがあります。ですからそのような感情がコントロール出来ない、自分の欲求・欲望がコントロール出来ないことによってすべてを失うということがあります。これではもちろんいつまでもたっても地上における成功もおぼつかないわけです。地上最大、地上最高の指導者、リーダーというのはモーセという人であります。イスラエル民族を、300 万人もの民を当時世界最強と言われていたエジプトから脱出させて、そして40年間も国を持たない状態で荒野の旅を導いた人です。それほどのカリスマ的なリーダーは、歴史上他にはありません。そのモーセは地上の誰にも優って非常に謙遜であった、非常に柔和であった、と呼ばれています。民数記 12 : 3（さて、モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。）にそう書かれています。地上最大、最高の指導者モーセは地上のだれよりも柔和であった、謙遜であったと。実は新約聖書においてイエス・キリストもご自身のことを柔和だとおっしゃっています。マタイ 11 : 28 は皆さんよくご存じだと思います。

28 : すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

で、その後 11 章 29 節

29 : わたしは心優しく（この『心優しく』というところが「柔和」ということばです。）、へりくだっているから（謙遜だから）、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。

30 : わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

イエス・キリストとは心優しいお方である、柔和なお方である。そのイエス・キリストが地上において

大成功をおさめたということは、皆さんも認めざるを得ないところだと思います。「いや、十字架にかかって殺されたじゃないですか。」その通りです。でも三日目に甦りました。そして、イエスは今も生きていて、このイエスを信じる人たちは世界中にいます。一般的にはキリスト教は世界最大の宗教となったわけです。イエスほど成功した人はもちろん、モーセは古代においては成功者ですけれども、今に至るまで生き続けて、成功し続けているのは、この柔和なお方ひとりであります。このように霊的貧しさに気付いて、罪を嘆き悲しむ人は、自分が柔和になっているというところに気付くようになります。柔和でない人は、自分が霊的に貧しいということに気付いていない人です。柔和でない人は、自分の罪・他人の罪、それを心底から嘆き悲しんでいない人であり、すぐカッカしてしまう人、すぐコントロールを失ってしまう人は、まだ第1ステップ、第2ステップを踏んでいない人たちと言っていると思います。自分が柔和であるということに気付くということは、あらわれとしては自分自身をもはや誇示しなくなります。威張り腐ったり、虚栄心に走ったり、見栄を張らなくなる、威張らなくなるということです。神の力の下にひれ伏して、神の教えに対して素直に服従していく、それが柔和な人であり、このように一連の流れに是非注目して頂きたいと思います。先ずステップを踏んでいるように、霊的貧しさに気付く、そして罪を嘆き悲しむようになり、そして柔和になった自分に気付くようになります。それまではもっと自分をアピールして、自分の力を何とか誇示して、威張り腐って、自分がひとかどの人物であるかのように片意地張って、背伸びして生きてきたかもしれません。でも霊的貧しさに気づき、罪を嘆くようになり、柔和になっていきますと、自分自身を誇示することも虚栄心を抱くことも無くなっていきます。

そうなりますとあなたは次に飢え渴く思いを感じるようになります。なぜならば余計なものや有害なものを既に捨て去って、自分自身を空っぽにしたからです。それが第4ステップにつながっていきます。マタイ5:6です。

## 6：義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから。

これが第4ステップです。『義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから。』今皆さんは満ち足りているでしょうか。満足しているでしょうか。多くの人たちは満たされていません。不満だらけです。そして虚しさを感じていると思います。心が、心の中に何かポッカーリ穴が空いているようです。何をしても虚しいと。なぜならば未だにその人たちは自分の思いも心も神様に明け渡していない、空っぽにしているからです。飢え渴く状態にする、それが空腹にすることと同じことです。私が家に帰る前に、夕食前に、ちょっと小腹がすいたのでラーメン屋でラーメンを一杯食べてから家に帰るとするとどうでしょうか。腕を振るって妻がご馳走を用意していても、その一杯が空腹に入っていますから折角用意してもらったその豊かなおいしいご馳走を、私は十二分に味わうことはできません。「いや、もう食べてきたから。」とか。お腹がすいたからスナック菓子を食べ、ジュースを飲み、そうすると子供は間違いなくご飯が食べられなくなってしまいますから、親は「食事前にはお菓子は食べてはいけません。ジュースは飲んではいけません。」ということをお教えます。それと同じように私たちがこの世のジャンクフードばかり食べていますと、飢え渴くことを覚えないわけです。自分自身のことで頭も心も一杯にしてしまいますと、自分にとられてしまいますと、何でも自己中心、「私の、私に、私は、私を」そんなことばかり頭の中が一杯ですと、心が自分で一杯になっている状態ですと、飢え渴くということは無くなっていきます。自分が一番大事なんだと、自分のプライドにとられていきますと、心が飢え渴くということはありません。自分の願望、自分の欲望を実現することだけに毎日奔走するのです。何とかして自分の思い通りに、願い通りに物事を進めたいと。それは自分の義を建てようとするに等しいわけです。ここには神に対する態度が書かれています。『義』というのは、聖書では神との正しい関係を表す言葉です。神との正しい関係に飢え渴

いているでしょうか。それは霊的な事柄と置き換えても良いと思います。”things of the spirit”世的な事柄、自分の事柄でなくて、神の事柄、霊的な事柄に対して飢え渴きを感じているでしょうか。自分のことで頭が一杯になれば、当然聖書を読むこと、祈ること、教会に集うことなどは、二の次、三の次となってきます。飢え渴くことが無いからです。礼拝を守る、クリスチャンと交わる、そういうことを必要としなくなります。欲することが無くなってきます。それは、義に飢え渴いていないからです。この世のジャンクフードで心を満たそうとするから。余計なもの、余分なものばかりを取り入れているから。自分自身に完全にとらわれてしまっているからです。

で、第5ステップとして7節に目を留めて下さい。

**7：あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから。**

もしあなたが自分自身を空っぽにするならば、自分にとられるということをやめて、解放されて、神様ご自身によって自分を満たして頂く、神の愛によって自分を満たすということをする、今度は他者へ目が向くようになります。隣人を愛するようになります。今まで赦せなかった人を赦せるようになります。今まで気にも留めなかった人に優しい言葉をかけられるようになります。全くケアなんて考えなかった人たちに、ケアをするようになります。義を求めて生きる人ほど益々あわれみ深くなり、逆に罪深い自己中心的な人間ほど他者に対しては冷酷に、非情になっていくわけです。常に批判的になります。常に人のあら捜しばかりするようになります。ルカ 18：9 以降を読ませて頂きます。

**9：自分を義人だと自任し（自分は正しいと、間違っていない、周りが間違っていると、自己義認する人です）、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。**

**10：「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。（取税人というのは、ローマ帝国の犬となって同胞から税金を巻き上げ、そこに上乘せしてピンハネする人たちです。ですからユダヤ人からは罪人としてレッテルを貼られた人たちでした。）**

**11：パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるる者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。』**

**12：私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』**

**13：ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』**

**14：あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。』**

義を求めて生きる人ほど益々あわれみ深くなり、逆に罪深い高慢な人間ほど他者に対しては非常に、冷酷で、批判的になります。

次に第6ステップとしてテキストに目を戻して下さい。マタイ 5:8 になります。

**8：心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから。**

第6ステップ。第5ステップでは再び自分自身に対する態度になっています。第6ステップはまた罪に対する態度です。第1ステップから第4ステップまで自分に対する態度、罪に対する態度、他者に対する



態度、神に対する態度ということで見てきたのですが、第5ステップ以降も自分、罪、他者、神と態度が色分けされます。そして第6ステップでは、『心のきよい者は幸いです。』とあります。『きよい』と『きれい』は異なります。この違いも是非注意して下さい。イエス・キリストを信じることによって罪深い心は洗いきよめられます。『きよい』というのは英語では”pure”が使われています。”pure in heart”心がピュアな人ということです。心が『クリーン』とは違います。その違いを分かり易く説明すると、例えば石鹸を考えて見て下さい。石鹸は「クリーン」なものですが、すべての石鹸がピュアというわけではありません。100%ナチュラルというわけではないということです。クリーンな石鹸の中にも100%ピュア、ナチュラルなものばかりではないと皆さんもよくご存じだと思います。防腐剤が入っています。合成香料が入ってますとか、殺菌剤が含まれていますとか、変質防止剤が入っていますとか、タール色素だとか、合成界面活性剤だとか、保湿剤だとかいろいろなものがクリーンな石鹸の中にも含まれています。でもピュアというのは余分なものが一切入っていない100%ナチュラルなものです。ピュアというのは、余計なものには一切とらわれないという状態、混じり気のないという状態、純粹であるということです。たとえクリスチャンになっても、イエス・キリストを信じたことによって、イエスの十字架の贖いの血潮によってその汚い心が洗いきよめられた者とは言え、神が見えなくなってしまうことが時にあります。「私はクリスチャンなんですけど神が見えないのです。一体神様はどこへ行ってしまったのですか。」見えなくしてしまっている邪魔なものがあります。それは何らかの香料かもしれません。何らかの見た目を良くする色素かもしれません。何らかの添加物かもしれません。そうしたものがあなたの目を曇らせています。クリスチャンなのにピュアじゃない。クリーンかもしれませんがピュアじゃない。何か余計なものにとらわれて神が見えなくなってしまう。そういうことがあるかと思えます。

第7ステップ、これが9節です。再び他者に対する態度ということで、

## 9：平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。

平和をつくる、英語では”peace maker”と言われます。平和活動するためにプラカードを持って行進したりすることがここという平和をつくる人ではありません。聖書でいう、イエス・キリストがいう、最高の最善の平和活動とは、平和の君であるイエス・キリストを人々に宣べ伝えることです。人々が平和の福音を聞いて、イエス・キリストに心を開いたときに、彼らがイエスを心に迎え入れたときに、彼らの心は平安、平和になります。そしてそのような姿を見るときに、そのような瞬間に立ち会うときに、あなたも同時に祝福されます。心がピュアであると平和の君である、神であるイエス・キリストを見ることができるようになってきます。で、平和という言葉はヘブル語ですと有名な言葉で『シャローム』と言います。『シャローム』という言葉は「無事平穏である」という消極的な意味だけではなくて、人間の最高の幸せを作り出すもののすべてを指す言葉です。人間が果たす最高の役割である人と人との正しい関係も、この『シャローム』で表されます。理想的な状態を『シャローム』ともいうわけです。ですから争いや紛争がないという消極的なものにとどまらずに、むしろ健康であるとか、長寿、繁栄、勝利、救いといった積極的な意味もこの『シャローム』には含まれています。非常に豊かな言葉です。聖書においてこの『シャローム』、平和、平安というものは、やはり神との正しい関係がもたらすものだと教えておられます。旧約聖書のイザヤ32：17～18をお読みします。

17：義は平和をつくり出し（義とは神との正しい関係です。神との正しい関係が平和をつくる、平安をもたらす）、義はどこしえの平穏と信頼をもたらす。

18：わたしの民は、平和な住まい、安全な家、安らかないこの場に住む。

平和、平安、シャロームは神との正しい関係がもたらすと聖書は教えてます。それに対して**イザヤ 48 : 22**によると「**悪者どもには平安がない**」と**主は仰せられる**。と書いています。今あなたの心に平安はあるのでしょうか。なければあなたは悪者です。私の言葉じゃないですから、主は仰せられますと言ってます。私が言っているのではありません。神との正しい関係がなければ決して平安は来ません。どんな努力をしてもそれらはすべて気休めにしかなりません。平安がないから私たちは向精神薬、抗うつ剤、睡眠薬を飲むかもしれません。平安がないから私たちはカウンセリングやセラピーやセミナーに通うのかもしれませんが。でもそれらは神との関係が正しくされていなければ、恒久的な解決をもたらすわけではありません。一時的な気休めでしかなりません。逆にいつもそうしたものに頼っていかなければ、生きていけない者になります。薬がなければ旅行にも行けなくなります。医者が近くになれば、どこにも行けなくなります。不自由ですね。不安であります。で、ヘブル語で平安を『シャローム』と言いましたが、ギリシャ語では『エイレーネ』”eirene”と言います。『エイレーネ』というギリシャ語の原意は、「共に結ばれるもの、join together」という意味ですが、これはまさに神との関係が結ばれるということを示しています。イエス・キリストが罪によって破壊されてしまった、ギャップができてしまった神との関係を回復するために、修復するために、そのギャップを埋めるためにこの世に来て、十字架という橋渡しをして下さいました。イエス・キリストだけが、人間がどうすることもできない罪という問題を解決して下さい、そしてこの神と共に結ばれるように、そのことによって私たちが平安を持つことができるように、平和な暮らしができるように、その道筋をたてて下さいました。英語で『宗教』のことを『レリジョン』”religion”と言います。『レリジョン』という言葉が明治時代に入って来た時に、クリスチャンたちが宗教という訳語を作りましたが、残念ながらその『宗教』というのとは今日はちょっと誤解されていると思います。『レリジョン』の語源はラテン語で『レリギオー』という言葉ですが、文字通りは「一つに結ぶこと」ギリシャ語の『エイレーネ』に近いです。宗教の本質というのは、「神と私たちを結び合わせる、一つにする」というのが本来の宗教のありかたです。それが本物の宗教です。ですからイエス・キリストだけが神と私たちを一つに結ぶことができる存在です。

で、テキストに戻って頂いて、第 8 ステップとしてこれは神に対する態度ということにもなりますが、**マタイ 5 : 10~12**までお読みします。

**10 : 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。**

**11 : わたしのために人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。**

**12 : 喜びなさい。喜びおどりなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。**

これが幸福に至る第 8 ステップ、最終ステップ、八福の教えの 8 番目です。これまで第 1 ステップから霊的に貧しい者は幸いです。罪に嘆き悲しむ者は幸いです。柔和な者は幸いです。義に飢え渴く者は幸いです。心がピュアな者は幸いです。また平和をつくる者、平安をもつ者は幸いですと見てきましたが、そこまで見るとそういう人たちは人々から慕われる人たちに違いない、人々から尊敬される人たちに違いない、そういう人たちはもうこの世ではもてはやされて、人気者で、有名人になっているに違いないと皆さんは思ったかもしれませんが、そうではないとハッキリここに書いてあります。むしろ迫害される、そういう人たちは嫌われると。第 1 ステップから第 7 ステップを踏んだ人たちは、人気者になる、有名人になる、人々から慕われ尊敬されるんだ、喜ばれる人になると、人格者だと思うかもしれませんが、

でも実際には霊的現実はまったく異なります。むしろそういう人たちこそが、この世では嫌われる、迫害される、ののしられる、馬鹿にされる、傷付けられると言っています。幸せどころではないじゃないですかと思うかもしれませんが、**第2テモテ3:12**に

**12: 確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。**

素晴らしい約束がそこに書かれています。クリスチャンとして真面目に生きよう。この第1ステップから第7ステップをしっかり踏んで生きて行こうと思う者は、皆迫害を受けますと**第2テモテ3:12**に書いてあります。こういった約束は出来れば見たくない、むしろ私たちは自分にとってもっと都合の良いような、ちょっとご利益的な聖句に印をつけたり、アンダーラインを引こうといたします。**神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。ローマ8:28。**素晴らしい約束ですと、そこには印をつけて、線を引いて、でも迫害を受けます、ちょっとこれほど。真っ白かもしれません。つつい印をつけない、線をつけない、アンダーラインを引かない、そういう言葉は飛ばし読みをしようとしたり、特別心を留めないかもしれませんが、是非むしろアンダーラインを引かない、せんをつけない、そういう聖句をこれをいい機会に、目に留めて、心を潜めて瞑想して頂きたいと思います。**喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。**迫害される者は天において祝福されると書いてあります。そして預言者の仲間入りをするととも言われています。天において預言者と呼ばれる神のしもべたちと全く同じ報いを受けるということも書かれています。中には**ヘブル11章**を見て頂くと、そこには信仰列伝として偉大な信仰者たち預言者たちが出てきます。中には鞭打たれ、投獄され、のこぎりで生きたまま半分に切られてしまった、殉教してしまっただような人たちも登場します。彼らは皆天国に入っています。でも考えて見て下さい。もし、天国に行ったその殉教した、迫害を受けて地上では悲惨な、みじめな最期を遂げた、非業な最期を遂げた人たちが今天国に入って、彼らは「私は本当に後悔している。ののしられたり、馬鹿にされたり、迫害されたことを後悔している。もっと人々に受けの良いような生き方をして、世渡り上手になって、この世で成功してもっと立派な家に、もっと高級な車に、もっとゴージャスなブランド物を身に付けておけばよかった。」と彼らは天国で後悔しているのでしょうか。それとも彼らは「私はイエス・キリストの十字架の苦しみに預かれたことを何と幸いに、何という特権だと今ここに感謝できるのでしょうか」と。のこぎりで半分に切られた人たちは天国では喜びおどっているはずです。是非皆さんこのことに心を留めて欲しいと思います。私たちは、地上はもちろん生かされてる間はそこで幸福をつかむ、幸福に生きるそのような特権も、または権利というものも与えられているわけですが、でもこの地上は残念ながら長続きはしません。人間もいつまでも生きているわけではありませんが、しかし私たちにはイエス・キリストによって永遠の命が与えられ、そして永遠の世界、イエスの御国に入れて頂けるという素晴らしい特権が与えられております。そこは永遠に続く世界です。そこにおいて私たちは永遠に喜ぶことができます。そこを目指している者はどんなことがあっても、どんな迫害があっても、どんなつらい目にあっても、どんな嫌な思いをしても、どんなに傷つけられても、たとえのこぎりで生きたまま半分に切られたとしても、「恨みつらみをもって苦々しくどうしても人を赦せなくて、恐ろしい、死ぬのが怖い」、そんなような最期を遂げるようなことは絶対にありません。突然に「あなたの余命は何か月です、何日です」と言われても別段驚きません。急に青天の霹靂<sup>へきれき</sup>というような不幸が、事故が、悲惨が襲っても、何にもびくともしません。なぜならば『**生きることはキリスト、死ぬこともまた益だから**』ですと、クリスチャンは常に先を見ているからです。ここが私たちの永遠の住まいではない。私たちの幸福はあの世です。天国で報われる。だから私たちは、今地上にいながらもワクワクして、期待をして、希望をもって、常に喜び踊ることができると。その人は幸

いです。

最後にポイントとして誤解してしまうところもあろうかと思しますので。この『迫害』というのは『わたしのために』と11節にあります。イエスのために受ける迫害です。または『ありもしないことで悪口を浴びせ』られるということで、注意して頂きたいのは、クリスチャンで「私は迫害を受けました。私は悪口を浴びせられました。」と言ってイエスのためにというよりも、むしろ自分自身のゆえに。または『ありもしないこと』ではなくて、十分ありうることで、原因があることで、根も葉もあることで悪口を言われて、それをもって私たちは「迫害を受けました。」と勝手な思い込みはいけません。イエスのためにありもしないことで悪口を言われるときは幸いです。第1ペテロ4:14~16をお読みします。

**14: もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。**

イエスの名のためにあなたは非難を受けているのでしょうか。それとも自分の作った原因で非難をされているのでしょうか。自分の不甲斐なさや自分の首尾一貫しない言動で非難されているのでしょうか。自分の弱さや過ちで非難されているのでしょうか。それはクリスチャンのゆえに非難されて迫害されていることとは全く違います。「私ばかりこんな目にあって。私はクリスチャンだからこんな目にあうんだ。」とんでもない思い違いです。

**15: あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、悪を行う者、みだりに他人に干渉する者として苦しみを受けるようなことがあってはなりません。**

人殺し、「そんなことはしませんよ。」と言うかもしれませんが、イエスは「兄弟に向かって馬鹿者と言う」口から私たちは悪い言葉を出して人を平気で傷つけ殺してしまいます。盗人、悪を行う者、みだりに他人に干渉する。こうしたことで私たちは非難を浴びてしまう、悪口を浴びせられることはあります。これは『わたしのために』と言われる『イエスの御名のゆえ』とは全く違う話です。ありもしないことではありません。十分ありうることです。根も葉もあることです。混同してはいけません。すり替えてはいけません。そして16節には

**16: しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、この名のゆえに神をあがめなさい。**

また箴言27:14では『朝早くから、大声で友人を祝福すると、かえってのろいとみなされる。』と。

朝早くから、これは大声で友人を祝福するということが言われていますが、どんなにそれが良い言葉でも、それがたとえグッドニュースと言われる福音であっても、朝早く夜明け前から大声で、眠いののに、疲れているのに、そんないい言葉でも耳元で大声で言われても、それはかえってのろいとなってしまいます。かえってそのことで耳をふさがれてしまう、嫌われてしまう。ですから注意して頂きたいのは、自分の振舞いの為に、自分の愚かしさのゆえに、自分の足りなさのゆえに、配慮のなさのゆえに、ノンクリスチャンの人たちから悪口を言われても、「私はクリスチャンとして、イエスの名によって今迫害を受けた。」というふうには誤解してはいけないということです。ですからここでは是非『イエスのためにありもしないことで』これがキーワードであります。

これで終わりたいと思いますが、幸せに至るステップが8つありましたが、これには流れがあって、順

番があります。この中からいくつかを取り出して自分の出来そうなものという考えではいけません。しっかりと第1ステップから順当に進めて、幸福の階段を1段ずつ上がって頂きたいと思います。そして、最後に待っているのは迫害です。「やだな。」と思うかもしれませんが、でも迫害されたならば、あなたは主に認められたということを誇りに思って欲しいと思います。あなたはイエス・キリストに似る者といよいよされたんだということです。クリスチャンとして迫害もされていないならば、恥ずかしいと思って下さい。情けないと思って下さい。それを誤解してはいけないということです。自分の弱さや、愚かさや、自分で変なことを言って、それで馬鹿にされる。それは全く話が違いますから、もう一度第1ステップから考え直して欲しいと思いますけれども、とにかく最後には幸いである、祝福されている、幸福で満たされて満足する、それが私たちの主が用意して下さっている地上でのクリスチャン生活であります。またクリスチャンでない人も、是非幸せになりたい。本物の幸福をつかみたい。一時的ではない、気休めではない、永久・恒久的な幸せ。どんなことがあっても動じない、たとえ死に面したとしても私は恐れない。そのような幸福。何をしても虚しいという人たちが、「不安で不安で怖いんです」という人たちが、この中にいるならば、是非このイエスの説かれた『至福の教え・八福の教え』を素直に受け取って欲しいと思います。実際にこれを実践したお方は、誰よりも幸福なお方でした。誰よりも満たされていたお方。人間の最高の理想像と世界が認める方です。そのお方の名はイエス・キリストであります。イエスは机上の空論を述べたものではありません。イエスはこの教えに従って、教えた通りにご自身歩まれました。ですからイエスを見れば、これが人間の理想像である。クリスチャンと呼ばれない人たちですら、イエスは神の最高の理想像であると、あのマハトマ・ガンジーが思わず告白してしまったほど、イエスこそが理想であります。ですから是非イエスのように生きることは本当の意味で幸せだということを知ったならば、第1ステップからは始めて下さい。私は霊的に破産している。どうしようもない罪人であると。なんて罪というのは恐ろしいものか。神との関係を破壊してしまうものだって。そのように順当に進んで、柔和な者に変えられて下さい。義に飢え渴く者に変えられて下さい。そして心がピュアで、平和をつくる者。結果的には世では報われないかもしれませんが。馬鹿にされて、迫害されて、無理解で、拒否される、拒絶されるかもしれませんが、でも人がどう思おうと、何を言おうと、何をあなたにしようとも、イエスとあなたは同じになれるのです。イエスは、どんな扱いを受けても変わらないお方でした。そしてイエスは、敵からも最終的には認められたお方です。「この方には罪がない。」そしてイエスの十字架の苦しみをその目の前で見ていた死刑執行人のローマの兵士たちは「この方こそまことの神の子であった。」と告白するに至りました。そんな死に様が、私にも欲しいと。そんな死に方が素晴らしい生き様を表しているということを敵ですら認めざるを得ないほどの理想でありますので、是非このことを皆さんも考えて、そして考えるだけでなく、ステップを実際に踏んで欲しいと思います。どこからかステップを踏み間違えている人たちもこの中にはいようかと思えます。最後の結論を全く取り違えて、私は自分のゆえに迫害されているだけであって、自分の愚かしさのゆえに馬鹿にされているだけであって、遠ざけられて敬遠されているだけであって、全然「イエスの名によって」、全然「イエスのゆえに」とか、「ありもしないこと」でということではなかったんだということに気付いたならば、振り出しに戻って欲しいと思います。そういうサイクルによって私たちは常に安定した幸福感に満ちた生活を送ることが可能となります。では今日はこれで終わりたいと思います。